

聖書:第一列王記17章1～16節

説教:かめの粉は尽きず、壺の油はなくなるらない

はじめに

続けて第一列王記を見てまいります。北王国と南王国とに分裂してしまったイスラエルはそれぞれ独自の王を立てて、自分勝手な道を歩み始めます。前回は北王国の七代目の王となったアハブが何をしたのかを見てまいりました。アハブが妻に迎えたイゼベルはバアルと呼ばれる異教の神々を信じていたのですが、アハブもそれ拝むようになり、首都と定めたサマリヤの町の真ん中にバアルの神殿と祭壇を築きました。当然、人々は王さまが拝むものを真似して拝むようになりますから、あっという間に国中にバアルの祭壇が造られて、みなが拝むようになり、聖書の唯一の神はどこかに忘れ去られていった。そんな内容でした。

そのようにしてアハブが空しい神々を拝んでいるとき、神はどのようなことをされたのか、今日はその続きを見てまいります。

## 1 エリヤ

### 1) 雨が降らない

あるとき、神はギルアデの住民であったティシベ人エリヤをアハブの所に遣わし、このように言わせました。1節。「私が仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによるのでなければ、ここ数年の間、露も降りず、雨も降らない。」

バアルというのは、日本で言えば五穀豊穡、家内安全、商売繁盛の神です。それをアハブ王が信じていた。そのところへエリヤが現れて「雨が降らない」と宣言したということは、どういうことか。王さまが信じているバアル神は中身が空っぽでなんの力もない偽りの神であると言って、真正面からアハブに挑戦状をたたきつけたのと同じです。

### 2) 主のことばのとおりにした

当然アハブはカンカンになって怒り、エリヤを殺そうとする。そのままでは危ない。そこで神はどうしたか。あなたは東に向かってケリテ川のほとりに身を隠しなさいと言われ、エリヤをかくまいます。神はなんと配慮に富んだ方なのかと喜んだのもつかの間、耳を疑うようなことを神は続いて言われました。4節。「あなたはその川の水を飲むことになる。わたしは鳥に、そこであなたを養うように命じた。」

鳥が毎日、朝と夕方あなたの食糧を運んでくる。自分のいのちを鳥に預けなさいと言うのです。神はどうしてこんなことをするのか。エリヤは確かに神に仕える預言者として、主のことばによらなければ雨は絶対に降らないとアハブに宣言しました。でもそのときは、エリヤはどこか他人事のようにしか思っていなかったのではないか。主のことばのとおりには雨が降らなくても、あるいは仮に雨が降ったとしても自分には関係はない、そう思っていた。ところがそんなわけにはいなくなった。神は、エリヤをこの一連の事件のど真ん中に巻き込んでいくのです。「エリヤ、あなた自身まず、主が語ったことばどおりになるということ自分のいのちをかけて学びなさい。」荒削りの信仰者であったエリヤは、このようにして神からの訓練を受けることとなります。

### 3) ケリテ川で学ぶ

それから数ヶ月の間、確かに雨は降らずケリテ川の水が涸れ、主のことばのとおりになります。鳥はもみことばどおり毎日食べ物を持って来ました。このようにしてエリヤは主のみことばだけができることを身体で学んでいきます。そうしてから9節で神はこう語ります。「さあ、シドンのツアレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしはその一人のやもめに命じて、あなたを養うようにしている。」

シドンのツアレファテは、イスラエルからずつと北側の地中海沿岸にあった異邦人の土地です。なぜその町なのか、やもめとはだれのことであるか神は何も教えません。でもエリヤは今、すべて主のことばのとおりになることを学んだばかりです。主を信じて出かけて行きます。

## 2 異邦人のやもめ

### 1) 死のうとしているのです

10, 11節。「彼はツアレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、薪を拾い集めている一人のやもめがいた。そこで、エリヤは彼女に声をかけて言った。『水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。』彼女が取りに行こうとすると、エリヤは彼女を呼んで言った。『一口のパンも持って来てください。』」

エリヤが、らくだの毛の衣を着て、腰に皮の帯を締める預言者ユニフォームを身につけていたので、やもめもすぐにエリヤが預言者であることはわかったはずですが。でも、この女性は異邦人です。聖書の神を信じていたわけではない。それなのに12節でこう言うのです。「あなたの神、主は生きておられます。」どうしてこんなことばが出て来るのか。もっとわからないのはその次です。12節の後半。「私には焼いたパンはありません。ただ、かめの中に一握りの粉と、壺の中にほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本の薪を集め、帰って行って、私と息子のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしてしているのです。」

外国人で、それもたった今声をかけられて二言三言言葉を交わしただけの見ず知らずの男性に、一人の女性が生きるか死ぬかの深刻な問題をいきなり告白するのでしょうか。普通はしないでしょ。それなのにどうしてこのやもめはエリヤに自分のことを正直に言えたのか。実に単純なことですが、エリヤを信頼できる人だと思ったからでしょう。だから心を開いて正直に言えた。

## 2) へりくだるエリヤ

なぜ信頼できたのか。たとえば、エリヤが修行を積んだ世にも尊い高貴なお坊さんに見えたので、ありがたいありがたいということだったのか。そうではない。エリヤはなんと行って声をかけたのか。「水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。」自分は、何も持たない喉が渴いて弱り果てている旅人に過ぎません。そのようなへりくだった姿で、普段はユダヤ人から見下されている異邦人の女性に接してくれた。それだけでも驚きだったのですが、よく見るとそんなエリヤの背後に普通でないものがある。それがこの預言者の信じている神に違いない。それで「あなたの神、主は生きておられます」と言い、自分の苦しみを正直に打ち明けることができたのだと思います。

そうなのは、エリヤが最初から謙遜な人だったのではない。やはりケリテ川で毎日鳥を祈りながら待つしかない日々を過ごすうちに、自分は何も持たない者であることを徹底的に学び、砕かれていったのだと思います。

## 3) 二つの疑問

### ①なぜ大飢饉で苦しまなければならないのか

それはわかったとして、でもここにはいくつか疑問があります。今日は二つ挙げておきます。

まず一つ目の疑問。この親子がもう死ぬしかないところまで追いつめられるのはなぜか。雨が降らなかったせい。この家族だけではない。このやもめのような人たちがたくさんいた。一人の王が罪を犯したので、神が雨を降らせなかった。それはわかるとしても、だからと言って他の関係のない人たちが巻き添えになって死んでもかまわないというのか。それが聖書の神なのか。これが一つ目の疑問です。

### ②なぜエリヤが最初なのか

二つ目の疑問は13節です。「恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。その後で、あなたとあなたの子どものために作りなさい。」

これは普通、順序が逆ではないのか。エリヤは何様だと思っているのか。やもめは不服も言わずにエリヤのことばのとおりに従ってはいます。その結果、みなが十分に食べることができ、ハッピーエンドで終わる。でもなんだかすっきりしません。

## 3 神

### 1) 罪の世界に関わり続ける

まず一つ目の疑問から見ていきますが、そもそも、雨が降らなくなった責任はだれにあるのでしょうか。アハブが人を救うことのできない神を持ち込んで来て、それを国民に信じなさいと強制していった。罪を犯したアハブの責任です。そうであるならアハブだけが苦しめばいいはずですが。それなのに関係ないやもめの女が、どうして巻き添えにならないのか？

空しい神々を拜むことについてはアハブの父であるオムリの時代からすでにあつたわけですが、そのオムリについて16章26節でこう書かれていたのを思い出してください。「彼はネバテの子ヤロブアムのすべての道に歩み、イスラエルに罪を犯させ

(た)。」悪いことをしたのが王であることは確かです。しかしだからと言って国民は何も悪くはない、一方的な被害者である、とは言っていない。国民も罪を犯したのです。パウロはこう言っています。「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができ(ない)。」(ローマ書3章23節)やもめの女性も罪人なのです。罪ある者は、神のさばきから逃れることができません。ここでは雨が降らないというわざわいを、アハブ王はもちろんですが、一般の人々も被らなければならないのでした。

そこだけ見ると、なお神は厳しい方だという印象に終わります。でもエリヤはどこに遣わされたのかを思い出していただきたい。もう食べるものがない、死ぬしかないと思い詰めていた一人の外国人の女性の下に遣わされた。神はご存じなのです。社会の片隅で悩む人たちの叫び声を聴いておられる。それで身を低くするエリヤを神の代理人として遣わす。そこで何が起きたのか。

## 2) 主のことばを信じるか

このことを二つ目の疑問を通して考えます。なぜ、エリヤが先にパン菓子を食べるのか。そのような疑問でした。

この女性が、最初にエリヤから水をくださいと声をかけられたとき、エリヤの背後に神がおられることが見えたと言いました。だから正直に自分の苦しみを言うことができた。私たちはそれを見て、もうそれで十分な信仰ではないかと思うかもしれない。でも神はそれでよしとしなかった。もっとすばらしい信仰を与えようとされます。13節。「恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。その後で、あなたとあなたの子どものために作りなさい。」

エリヤからこう言われたとき、さすがに母親として子どもに最後の食事も与えられないのかと不憫に思い、悲しくなったかも知れません。でもエリヤは続けてこう語ったのです。14節「イスラエルの神、主が、こう言われるからです。『主が地の上に雨を降らせる日まで、そのかめの粉は尽きず、その壺の油はなくならない。』」

かめの粉が尽きず、壺の油がなくならない。これは大きな奇蹟です。私たちの目はそこに釘付けになる。でもここで大切なのはなにか。奇蹟が与えられることはもちろんすばらしいことですが、もっと大切なのは、主のみことばのとおりになると信じらるかどうか、そのことを神は問いかけてくる。

というのは、エリヤがそうだったのです。彼自身がそのことを学ぶためにケリテ川で徹底的に鳥に自分のいのちをゆだねる日々を送って、学んだ。そこを通らされたエリヤだからこそ、やもめの女に厳しく聞こえるけれど確信を持って言えるわけです。最後のわずかに残ったかめの粉、壺の油。そんなものを手放しても全く惜しいとは思わないほどの豊かな救いの恵みを神は与えてくださる。いま勇気を出してジャンプしなさい。そして救いの恵みを受け取りなさい。

## 3) エリヤのことばのとおりにした

それを聞いて女はどうしたか。15節。「彼女は行って、エリヤのことばのとおりにした。」信じる決断をします。もう最初のエリヤから声をかけられたときの弱々しい死にかけていた女性ではありません。神の救いをいただいて、もういちど生かされていく。神と共に歩み始める一人の女性がここにいます。罪によるわざわいである大飢饉の中で苦しんでいる者たちに神は目を注ぎ、救い出す。

これが今私たちに語られている主の約束でもある。主イエスキリストが、罪によって死にかけている私たちを必ず救い出す。それはあなたにも起きる。主のみことばどおりになることを信じなさい。神は今朝このように語ってくださいます。

死にかけていた者を救ってくださる神の御名をあげます。